View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

島根県立大学出雲キャンパス
紀要　第 12 巻，19-28，2017

看護系大学生の社会人基礎力の属性別の検討

小島　尚子*・落合のり子

概　　要

本研究の目的は，A 公立大学看護学科生の社会人基礎力の属性別の相違を検討することである。社会人基礎力は経済産業省により 3 分類 12 能力要素の構成とされている。1 年次生と 4 年次生の学生 134 名を対象に，看護学生の社会人基礎力を問う 36 項目の質問紙調査（北島ら，2011）を実施した。その結果，両学年とも 12 の能力要素の「規律性」や「傾聴力」は高く，「想像力」や「計画力」は低い傾向が見られた。しかし，1 年次生と 4 年次生に有意差は認められなかった。社会人基礎力育成のためには，学生の自己評価と他者評価を合わせて同集団を継続的に評価し支援する必要がある。

キーワード：看護学生，社会人基礎力

Ⅰ．諸　　言

2014 年に離職した新卒看護職員は，全体の 7.5％にのぼる。2010 年から 2014 年の 5 年間でほぼ横ばいという状況である（日本看護協会，2016）。また，看護管理者たちが挙げた新卒看護職員の離職要因のうち，最も多かったのは「基礎教育終了時点の能力と，看護現場が求める能力とのギャップ」であり，次いで多かったのは「現代の若者の精神的な未熟さや弱さ」であった（日本看護協会，2005）。

教育によって獲得される能力と現場で求められる能力のギャップについては，看護職のみならず，あらゆる職種に共通のことであり，職業人となる過程において，誰もが必ず経験することである。

問題となるのは次に挙げられた「若者の精神的未熟・弱さ」だと考える。新人で即戦力になれる人材はまれであり，現場で新たな技術や能力を身につけながら成長していく事が一般的である。しかしその過程で，当人が精神的な未熟・弱さを克服できなければ，途中で挫折し，やがては離職に至る恐れがある。

ところでこの，「若者の精神的未熟・弱さ」を指摘する声はいつの時代でも，年長者から若者に対して語られてきた言葉であった。そこで，そもそも精神的未熟さと言われる具体的要因について調べたところ，そこから見えてきたのは「現代の若者たちに特有な傾向（永田，2014）」であった。新卒看護職は，一概に精神が未熟だからということではなく，社会人基礎力が身についていないことが原因となり，看護技術の習得過程に円滑さを欠いている可能性が考えられた。

社会人基礎力とは，2006 年に経済産業省が「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」として示した「前に踏み出す力（アクション）」「考え抜く力（シンキング）」「チームで働く力（チームワーク）」の 3 つの能力とそれを構成する 12 の能力要素で構成された指標である（経済産業省，

* 島根県立大学卒業生
・本研究は 2016 年度卒業の看護研究論文を加筆・修正したものである。

2006)。

一般に，学生が社会人基礎力を身につけることで,「学校卒業後のスムーズな職場に定着」を促進できると考えられている。しかし近年，子どもの生育の基盤である生活環境は著しく早いペースで変化している。あわせて家庭や地域の教育力の低下，子どもの生活体験の減少が報告されている（北島ら，2011；軸丸ら，2006)。生活体験とは，洗濯・炊事など日常生活を送るため，また遊びを通し人と関わる時などに体験すること，つまり基本的生活習慣や生活技能，遊び体験などの複合的な体験である。人間性や基本的習慣を育成することに大きな役割を果たしてきた，家族や地域の機能は低下しており，その他の機関（たとえば教育の場など）で補う必要があると考えられる。

看護学生にとっての社会人基礎力は，大学生に広く普遍的に求められる態度・技能にも一致する。また，社会人基礎力は看護師が病院組織の一員として働くための力であり，看護師の職場適応を促進し，看護実践の基盤となる能力になり得る。社会人基礎力を，教育・研究・実践との間の共通言語として捉えることで，スキルアップ可能なものとして，建設的な思考を持って改善に向けた行動をとれるようになると考えられている（北島ら，2011)。

また，学生時代から社会人基礎力を身に付けていれば，円滑な技術習得が可能になり，就職後に専門職としての職業的社会化・職場適応が促進され（北島ら，2011)，離職防止に役立つと考えた。

A公立大学では1年次生の社会人基礎力の調査は実施されたが，臨地実習を終えた4年次生を対象とした調査は実施されていないため，今回研究に取り組むこととした。

Ⅱ．研究目的

本研究の目的は，A公立大学看護学科学生の社会人基礎力の属性別の相違を検討することである。

Ⅲ．方　　法

1．調査対象

A公立大学看護学科学生のうち調査協力の同意を得られた，実習経験のない1年次生と実習経験を積んだ4年次生を対象とした。社会人経験者は社会人基礎力が高い（北島,2011）ため，対象としなかった。

2．データ収集方法

「看護学生の社会人基礎力」を問う36項目（北島ら，2011）および学生の属性について無記名自己記入式質問紙による調査を行った。当該学生の集まる講義室にて文書と口頭による調査の説明を行った後，質問紙を配布した。回収は回収箱に自主提出を求め，質問紙の投函をもって研究への同意を得たとみなした。データ収集時期は，1年次生は入学後4か月経過した7月，4年次生は総合実習終了後の8月であった。

3．調査内容

調査対象者の属性（学年，性別，年齢，一人暮らし経験の有無，就労の有無，結婚の有無，アルバイト経験の有無)，北島ら（2011）が考案した社会人基礎力を問う36項目を用いて，調査対象者集団の［アクション］,［シンキング］,［チームワーク］，社会人基礎力を調査した。

調査項目は，［アクション］について「主体性」「働きかけ力」「実行力」の3能力に対して9項目，［シンキング］について「課題発見力」「計画力」「創造力」の3能力に対して9項目，［チームワーク］について「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」「規律性」「ストレスコントロール力」の6能力に対して18項目の，12能力要素・36項目から構成されている。それぞれの項目について，「全くあてはまらない」が1，「ほとんどあてはまらない」が2，「あまりあてはまらない」が3「ややあてはまる」が4，「かなりあてはまる」が5，「非常にあてはまる」が6である，6段階のリッカートスケールを使用した。

なお，本研究で社会人基礎力測定のために使用した質問項目の使用については作成者に許諾を得て実施した。

4．分析方法

Microsoft Excel 2010 を用いて，社会人基礎力 3 能力 12 能力要素をそれぞれ単純集計の後，各得点・総合得点を属性別でマンホイットニーの U 検定を行い，有意差を確認した。

Ⅳ．倫理的配慮

対象者に対して研究の目的，方法，アンケート調査票は無記名で行い個人が特定されないこと，自由意思による参加，不参加による不利益は生じないこと，データは研究目的以外に使用しないこと，データの厳重な保管と保存媒体の破棄，結果は公表することを依頼文にして説明し協力を得た。なお，本研究は島根県立大学看護学部の「学生の研究における倫理的配慮」に関する審査に基づき，該当看護領域責任者の承認を得て実施した（承認番号：H28- 公 08）。

Ⅴ．結　　果

1．質問紙の回収状況と対象者の属性

回収数は，1 年次生が 71 名（回収率 98.6%）であった。記載漏れのあるものと就職経験のあるものを除いた有効回答数は 65 名（有効回答率 91.5%）であった。また，4 年次生は 62 名（回収率 100%）で，有効回答数 56 名（有効回答率 90.3%）であった。

平均年齢は，1 年次生が 18.4 歳 ± 0.48 で，4 年次生は 21.4 歳 ± 0.59 であった。性別は，1 年次生で女性 58 名（89.2%），男性 7 名（10.8%）で，4 年次生が女性 51 名（91.0%），男性 5 名（8.9%）であった。1，4 年次生ともに未婚者のみであった。アルバイト経験のある者は，1 年次生は 45 名（69.2%）で平均勤続年数は 0.43 年 ± 0.89，4 年次生は 55 名（98.2%）で平均勤続年数は 3.27 年 ± 0.93 であった。一人暮らし経験がある者は，1 年次生が 36 名（55.4%）で，4 年次生は 40 名（71.4%）であった（表 1）。

2．項目別得点

36 項目では，1 年次生の平均 4.1（SD=0.32）で最小値 3.5，最大値 4.7 であった。4 年次生は平均 4.1（SD=0.37）で，最小値 3.5，最大値 4.9 であった。12 能力要素では，1 年次生の平均 4.1（SD=0.29），最小値 3.5，最大値 4.7 であった。4 年次生は，平均 4.1（SD=0.35），最小値 3.6，最大値 4.8 であった。

1，4 年次生ともに，12 能力要素全体の中で平均よりも，1 年次生 +0.6，4 年次生 +0.7 と高かったのはチームワークの中の「規律性」であった。36 項目では「31. メンバーに迷惑をかけないように，ルールや約束・マナーを理解している」1 年次生 +0.6，4 年次生 +0.8，「33. 規律や礼儀が求められる場面では，礼節を守ったふるまいをしている」1 年次生 +0.6，4 年次生 +0.7，の 2 項目が特に高かった。

反対に平均より低かったのは，［アクション］

表 1　調査対象の属性

		1年 n=65	4年 n=56
		n （%）	n （%）
性別	男	7 （10.8）	5 （8.9）
	女	58 （89.2）	51 （91.1）
婚姻	既婚	0	0
	未婚	65 （100）	56 （100）
アルバイト経験	あり	45 （69.2）	55 （98.2）
	なし	20 （30.8）	1 （1.8）
一人暮らし	あり	36 （55.4）	40 （71.4）
	なし	29 （44.6）	16 （28.6）
年齢(歳) 1)		18.4±0.48	21.4±0.59
アルバイト経験年数（年）1)		0.43±0.89	3.27±0.93

1）平均値±SD

の中の,「働きかけ力」で4年次生－0.6であった。中でも「06.グループの目標を達成するために積極的にメンバーに働きかけている」は両学年共にやや低く,1年次生－0.6,4年次生－0.5であった。また,シンキングで低いのは「計画力」1年次生－0.4,4年次生－0.4,「創造力」1年次生－0.6,4年次生－0.5であった。36項目の中では「16.複数のもの・考え方・技術等を組み合わせ,新しいものを作り出している」1年次生－0.6,4年次生－0.5,「17.従来の常識や発想を転換し,新しいものや解決策を作り出している」1年次生－0.6,4年次生－0.6が最も低かった(表2)。

3．検定結果

学年,性別,アルバイト経験の有無,一人暮らしの経験の有無,結婚の経験の有無による社会人基礎力の相違について,Mann-WhitneyのU検定を用いた。両学年共に性別・結婚の有無についての相違は,比較対象の人数が大幅に違うため検定が不可能であった。同様に,4年次生のアルバイト経験の有無についても検定が不可能であった。

学年の比較では,[シンキング]・[チームワーク]・社会人基礎力全体の平均順位は4年次生が1年次生を上回り,[アクション]・〔社会人基礎力〕の平均順位においては,1年次生が4年次生を上回っていた。しかし,各3能力と社会人

表2　36項目・12能力要素別社会人基礎力の合計得点と平均点

			36項目				12能力要素	
			1年		4年		平均	
			平均	SD	平均	SD	1年	4年
アクション	主体性	01.グループでの取り組みで、自分の役割は何かを見極めている	3.9	0.76	3.8	0.88	4.0	3.9
		02.困難なことでも自分の強みを生かして取り組んでいる	4.1	0.84	3.9	0.77		
		03.自分の役割や課題に対して自発的・自律的に行動している	4.0	0.87	3.9	0.94		
	働きかけ力	04.メンバーの協力を得るために、協力の必要性や目的を伝えている	3.9	0.93	3.8	0.97	3.9	3.7
		05.状況に応じて効果的な協力を得るために、様々な手段を活用している	3.9	0.70	3.8	0.79		
		06.グループの目標を達成するために積極的にメンバーに働きかけている	3.7	0.84	3.6	0.85		
	実行力	07.目標達成に向かって粘り強く取り組み続けている	4.2	0.91	4.1	0.86	4.1	4.1
		08.とにかくやってみようとする果敢さを持って課題に取り組んでいる	4.1	1.04	4.1	1.01		
		09.困難な状況から逃げずに目標に向かって取り組み続けている	4.0	0.93	4.0	0.94		
シンキング	課題発見力	10.目標達成のために現段階での課題を的確に把握している	3.8	0.87	3.9	0.88	4.0	4.0
		11.現状を正しく認識するための情報収集や分析をしている	3.8	0.85	3.9	0.74		
		12.課題を明らかにするために、他者の意見を積極的に求めている	4.2	1.07	4.3	0.82		
	計画力	13.目標達成までのプロセスを明確化し、実現性の高い計画を立てている	3.6	1.00	3.6	0.95	3.7	3.7
		14.目標達成までの計画と実際の進み具合の違いに留意している	3.7	0.97	3.6	0.82		
		15.計画の進み具合や不測の事態に合わせて、柔軟に計画を修正している	3.8	0.94	3.9	0.88		
	創造力	16.複数のもの・考え方・技術等を組み合わせ、新しいものを作り出している	3.5	1.02	3.6	1.03	3.5	3.6
		17.従来の常識や発想を転換し、新しいものや解決策を作り出している	3.5	0.77	3.5	1.04		
		18.目標達成を意識し、新しいものを生み出すためのヒントを探している	3.6	0.93	3.7	1.05		
チームワーク	発信力	19.グループでの取り組みで、メンバーに情報をわかりやすく伝えている	4.0	0.87	3.7	0.88	4.0	3.8
		20.メンバーがどのような情報を求めているかを理解して伝えている	3.9	0.84	3.8	0.86		
		21.話そうとすることを自分なりに理解したうえでメンバーに伝えている	4.2	0.81	4.1	0.77		
	傾聴力	22.内容の確認や質問等を行いながら、メンバーの意見を理解している	4.3	0.87	4.3	0.69	4.4	4.4
		23.相槌や共感等により、メンバーに話しやすい状況を作っている	4.6	0.95	4.6	0.82		
		24.先入観や思い込みをせずに、メンバーの話を聞いている	4.3	0.91	4.3	0.85		
	柔軟性	25.自分の意見を持ちながら、メンバーの意見も共感を持って受け入れている	4.5	0.89	4.4	0.85	4.2	4.3
		26.なぜそのように考えるのか、メンバーの気持ちになって理解している	4.2	0.84	4.4	0.81		
		27.立場の異なるメンバーの背景や事情を理解している	4.0	0.83	4.1	0.62		
	状況把握力	28.周囲から期待されている自分の役割を把握して、行動している	3.8	0.97	3.9	1.01	4.1	4.1
		29.自分にできること・他のメンバーができることを判断して行動している	4.1	0.87	4.1	0.62		
		30.周囲の人間関係や忙しさを把握し、状況に配慮した行動をとっている	4.3	0.97	4.3	0.66		
	規律性	31.メンバーに迷惑をかけないように、ルールや約束・マナーを理解している	4.7	1.02	4.9	0.76	4.7	4.8
		32.メンバーに迷惑をかけたとき、適切な事後の対応をしている	4.6	0.98	4.7	0.85		
		33.規律や礼儀が求められる場面では、礼節を守ったふるまいをしている	4.7	0.95	4.8	0.86		
	ストレスコントロール力	34.グループでの取り組みでストレスを感じる時、その原因について考えている	4.1	0.91	4.3	1.03	4.3	4.4
		35.人に相談したり、支援を受けたりして、ストレスを緩和している	4.4	1.13	4.7	1.02		
		36.ストレスを感じても、考え方を切り替え、コントロールしている	4.3	1.03	4.3	1.01		
		平均	4.1		4.1		4.1	4.1
		SD	0.32		0.37		0.29	0.35

表３　学年による看護系大学生の社会人基礎力の差

	1年生					4年生					有意差
	N	中央値	最小値	最大値	平均順位	N	中央値	最小値	最大値	平均順位	
ｱｸｼｮﾝ	65	36	19	50	64.22	56	35	24	47	57.27	0.28
ｼﾝｷﾝｸﾞ	65	34	14	48	60.36	56	33.5	21	48	61.74	0.83
ﾁｰﾑﾜｰｸ	65	78	43	99	60.68	56	76	58	102	61.38	0.91
社会人基礎力合計得点	65	146	76	192	61.73	56	144	116	188	60.15	0.80

Mann-WhitneyのU検定による　　p＜0.05

表４　アルバイト経験の有無による看護系大学生（１年次生）の社会人基礎力の差

	1年次生										
	あり					なし					有意差
	N	中央値	最小値	最大値	平均順位	N	中央値	最小値	最大値	平均順位	
ｱｸｼｮﾝ	45	36	23	50	33.50	20	36	19	43	31.88	0.75
ｼﾝｷﾝｸﾞ	45	34	20	48	32.67	20	35	14	47	33.75	0.83
ﾁｰﾑﾜｰｸ	45	78	52	98	33.71	20	77	43	99	31.40	0.65
社会人基礎力合計得点	45	146	95	192	33.49	20	144.5	76	183	31.90	0.75

Mann-WhitneyのU検定による　　p＜0.05

表５　一人暮らし経験の有無による看護系大学生の社会人基礎力の差（１年次生）

	1年次生										
	あり					なし					有意差
	N	中央値	最小値	最大値	平均順位	N	中央値	最小値	最大値	平均順位	
ｱｸｼｮﾝ	34	37	19	45	33.31	27	36	23	50	28.09	0.25
ｼﾝｷﾝｸﾞ	34	35	14	47	33.81	27	33	20	48	27.46	0.16
ﾁｰﾑﾜｰｸ	34	79.5	43	99	32.71	27	75	52	98	28.85	0.40
社会人基礎力合計得点	34	150.5	76	183	33.59	27	140	95	192	27.74	0.20

Mann-WhitneyのU検定による　　p＜0.05

表６　一人暮らし経験の有無による看護系大学生の社会人基礎力の差（４年次生）

	4年次生										
	あり					なし					有意差
	N	中央値	最小値	最大値	平均順位	N	中央値	最小値	最大値	平均順位	
ｱｸｼｮﾝ	40	35.5	24	47	29.81	16	33.5	27	46	25.22	0.34
ｼﾝｷﾝｸﾞ	40	34	21	48	29.86	16	32.5	26	45	25.09	0.32
ﾁｰﾑﾜｰｸ	40	77	58	102	30.10	16	74	63	91	24.50	0.25
社会人基礎力合計得点	40	145	116	188	30.74	16	138	122	182	22.91	0.10

Mann-WhitneyのU検定による　　p＜0.05

基礎力共に有意差は認められなかった（表３）。

調査実施前，調査対象であった１年次生は入学後日が浅く学生生活での経験も少ないため，卒業を前にした４年次生と比べて，４年次生が１年次生よりも社会人基礎力があり有意差が認められると考えていた。しかし，1，4年次生間で，3能力・総合の社会人基礎力ともに有意差が認められず，平均順位にも大きな違いがなかった。そこで，同学年の中での経験の違いが社会人基礎力の値に影響を及ぼしているのではないかと考え検定を行った。

１年次生において，アルバイトの経験の有無の比較では，経験あり群が，［アクション］・［チームワーク］・社会人基礎力において平均順位が上回り，［シンキング］については経験なし群が上回った。しかしいずれも有意差は認められなかった（表４）。４年次生では，アルバイト経験者が98.2％と，比較するには未経験者人数があまりに少なかったため，比較項目から除外した。

一人暮らし経験の有無の比較では，両学年ともに，あり群がなし群よりも３能力・社会人基礎力すべてにおいて平均順位は上回っていたが，有意差は認められなかった（表５，６）。

表６　看護系大学４年次生 270 名の社会人基礎力との比較

四分位範囲	最小値		第1四分位範囲		第2四分位範囲(中央値)		第3四分位範囲		最大値		四分位範囲	
	4年	北島	4年	北島	4年	北島	4年	北島	4年	北島	4年	北島
アクション	24	15	31.75	32	35	36	38.25	39	47	53	6.5	7
主体性	6	4	10	11	12	12	12.25	13	16	18	2.25	2
働きかけ力	6	3	10	10	12	12	12.25	13	15	18	2.25	3
実行力	5	4	11.75	10	12	12	14	14	16	18	2.25	4
シンキング	21	13	29.75	30	33.5	33	38	36	48	50	8.25	6
課題発見力	7	6	11	11	12	12	13	13	17	18	2	2
計画力	5	3	10	9	11	11	13	12	17	17	3	3
創造力	3	4	9	9	11	10	12.25	12	15	18	3.25	3
チームワーク	58	43	72	71	76	77	84	83	102	104	12	12
発信力	8	3	10.75	10	11.5	12	12	13	17	18	1.25	3
傾聴力	8	8	12	12	13	13	14.25	14	18	18	2.25	2
柔軟性	7	6	12	12	13	12	14	14	17	18	2	2
状況把握力	8	4	11.75	11	12	12	13	13	16	18	1.25	2
規律性	8	6	13	12	14.5	14	15.25	16	18	18	2.25	4
ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力	9	4	12	11	13	13	15	14	18	18	3	3
合計	116	86	138.75	135	144	145	153.75	157	188	197	15	22

A公立大学看護学科（4年）　N=56　　北島ら(4年) N=270

４. 他の看護学部との比較

北島らが調査した看護系学部，学科を有する４年制大学６校の４年次生の社会人基礎力を調査した結果（北島ら，2012）と，今回調査した４年次生の四分位範囲の値がほぼ変わらないことが分かった（表６）。

Ⅵ. 考　　察

１．社会人基礎力の得点結果について

１年次生で，アルバイト経験の有無による社会人基礎力の有意差は認められなかった。これは，平均勤続年数が 0.4 年 ± 0.89 であり，十分な社会的体験をしているとは言いがたいためではないかと考えられる。また，一人暮らし経験の有無による社会人基礎力の有意差は認められなかったものの，両学年ともに経験あり群がなし群よりも平均順位が上回っていた。今回の調査では，一人暮らし経験が明らかに社会人基礎力を高めるとは判断できないが，親元や親しい人と離れて暮らす経験は，社会人基礎力育成に何らかの影響を及ぼしている可能性があると考えられる。「アクション」について，１年次生の平均が４年次生よりかなり上回っている。調査時１年次生は入学後約４か月で看護実習未経験，反対に４年次生は実習経験済み・就職活動を経験している。４年次生は大学内のグループ活動だけでなく，大学外の集団との交流経験も豊富になっていると考えられる。その経験の中で困難を感じる機会も多かったであろう。逆に１年次生はそのような困難感を感じる機会が４年次生よりもまだ少ないと考えられる。そのために，他者に働きかける力である「アクション」に大きな差が生まれた可能性がある。また，「社会人基礎力」について若干１年次生が４年次生を上回っていたが，「シンキング」「チームワーク」ともに大きな違いは見られず，先ほど述べた「アクション」が４年次生よりも大きく上回っていたためだと考える。

社会人基礎力の平均順位が４年次生よりも１年次生の方が高いことも，先ほど述べた「アクション」と同様に，生活していく上での困難感の経験数の違いが影響している可能性があると考えられる。

北島らが調査した看護系大学６大学の４年次生の社会人基礎力（北島ら，2012）と，４年次生の結果では，それぞれの四分位範囲・偏差ともに大差はなかった。このことから，両者の社会人基礎力にあまり差はないことが考えられる。また，他学部の大学を卒業した全国の 22-26 歳の社会人基礎力では，働きかけ力と発信力が最も低く，次いで創造力が低かった（河合塾，

2011)。本調査と，それらの調査を合わせ比較等してみると，全体的に働きかけ力・創造力は共通して低い可能性があり，この二つの能力は学生時代からの支援が特に必要であると考えられる。

本研究の調査対象が，なぜ働きかけ力と創造力が低値であったのか考察した。働きかけ力についての質問項目の中で「06. グループの目標を達成するために積極的にメンバーに働きかけている」は両学年共に低値を示した。「働きかけ力」とは，「他人に働きかけ巻き込む力」と定義されていて（経済産業省，2005)，「働きかけ力」を発揮するためには，「物事に進んで取り組む力」である「主体性」をもっていなければならない（箕浦・高橋，2012)。しかし，「働きかけ力」は低いが「主体性」は 12 能力要素の平均よりもやや低値であったものの，大きく低いというわけではない。この「働きかけ力」は対人関係を保とうとすると，発揮しづらくなるともいわれている（箕浦ら，2012)。両学年共に 3 能力のうち，［チームワーク］が他の 2 能力よりも高得点であった。さらにその中でも，規律性についての質問項目の中で「31. メンバーに迷惑をかけないように，ルールや約束・マナーを理解している」「32. メンバーに迷惑をかけたとき，適切な事後の対応をしている」が特に高かった。このことから，働きかけ力が低く出たのは，1，4 年次生が対人関係を特に保とうとしているからだという可能性が考えられる。

創造力についての質問項目で「18. 目標達成を意識し，新しいものを生み出すためのヒントを探している」が低く，「16. 複数のもの・考え方・技術等を組み合わせ，新しいものを作り出している」「17. 従来の常識や発想を転換し，新しいものや解決策を作り出している」が最も低値であった。看護教育では，その専門性のために知識・技術の習得を重視して学習を行う傾向にある。このことから，創造力が低値を示す一つの要因に，知識はあるものの，その知識を組み合わせるなどして新しいものを考える経験は不足している可能性があると考えられる。

２．社会人基礎力を身につけるために

評価の傾向として，12 能力要素の多くは看護学生の自己評価よりも，教員および外部評価者等の他者評価が高いという報告がある（社会人基礎力育成ワーキンググループ，2010)。その報告でも特に「創造力」に関する学生の自己評価は低かったが，他者評価は高く出ていた。このことから，学生が自分の能力に自信が持てていないため，低く評価を提示している可能性が考えられる。「傾聴力」「柔軟性」についても他者の存在を意識する項目ではあるが，「創造力」との大きな違いは，能動的に自分で考えたものを他者に披露するかどうかという点だと考える。「傾聴力」「柔軟性」ともに他者からの働きかけを受ける行動，つまり受動的な行動であるため，他者からというよりも，「自分がどう対応したか」という自己評価が評価基準になりやすいと考えられる。本研究も学生の主観的な自己評価であり，「傾聴力」「柔軟性」「ストレスコントロール力」など，比較的自己完結的に能力を解釈できるものが平均より高く，反対に，「働きかけ力」「創造力」などのように，自分から能動的に行動したことに対して，他者からの視点での評価があり得ると，強く感じられる項目は平均より比較的低いことから，学生が他者からの評価を想像した時に実際の能力よりも低値を示す傾向がある可能性が考えられる。

1，4 年次生間で社会人基礎力に有意差がなく平均順位もほぼ変わらなかったことから，両学年の社会人基礎力に差はないと考えられる。これに加えて，［シンキング］，［チームワーク］は 4 年次生の方が高いが 1 年次生の［アクション］は 4 年次生とあまり差がなかったという調査結果がある（北島ら，2011)。これらのことから，社会人基礎力は必ず 1 年次生が低く，時間を経てから高い集団になるわけではないことが考えられる。今回の研究調査対象である 1，4 年次生は別々の集団であるので，社会人基礎力が経年的にどう変化するかを測定するためには，同じ集団を継続的に調査する必要があると考える。

つまり，今後正確に社会人基礎力を把握し，学生を支援していくためには，自己評価と他者評価を合わせて同集団を継続的に評価する必要

がある。

得点数に囚われると他者よりも高い評価でありたいという思いが発生する可能性がある。特に若者は仮想的有能感を持ちやすい傾向にあるといわれている(速水ら,2004)。「仮想的有能感」とは,「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく,他者の能力を批判的に評価,軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」と速水らは定義している。

優劣をつけようとすると,得点だけに注目するかもしれない。これは建設的な考えとは言えないだろう。そこで,社会人基礎力についての評価(自己評価・他者評価,継続的な計測から等)を,自分自身について振り返り・気づきを得られる良い機会だと学生が自分で受けとめ,自らのレベルを確認して次の学習計画を前向きに決められるように支援することも必要であると考えられる。つまり,学生が結果を「優劣をつけるための評価,評価のための評価」として捉えるのではなく,社会人基礎力を『自分に必要な力を可視化するためのツール』として捉えられるように支援することが,社会人基礎力を育てる一つの方法として挙げられると考える。

3．本研究の限界と課題

本調査で,1,4年次生の社会人基礎力が明らかになった。しかし,他者評価や周辺環境等は明らかにできていないため,調査対象の本来の社会人基礎力や,結果の原因を把握できない。そのため,調査時の学生が持っている社会人基礎力が正確に把握できるように,教員や外部指導者の評価や,看護学生の学生生活の把握も同時に行う必要があると考える。

質問文・質問形式によって,結果として出る社会人基礎力の値が変化する可能性があるので,他の集団・組織と比較する場合,様々な分野の学生が対象であっても,理解しやすい表現方法を使った社会人基礎力計測ツールを使用・開発する必要がある。

そして,学部別・地方別の社会人基礎力を明らかにして,全国の学生と比較し,特徴を知ることは,大学生そのものの傾向や学部別の傾向の存在など,伸ばすべき力が明らかになるため必要だと考えられる。しかし,全国規模の比較はまだ十分に行われていない。そのため今後実施する必要があると考えられる。

Ⅶ. 結　　論

1,4年次生の学年間で社会人基礎力に有意差は認められなかった。また両学年共に,12能力要素ごとの得点平均より,[チームワーク]の「規律性」が特に高く,反対に,[アクション]の「働きかけ力」,[シンキング]の「計画力」「想像力」が低い,という結果であった。

自己完結的に能力を解釈できるものが平均より高得点だが,他者からの視点の評価があり得ると強く感じられる項目は平均より比較的低いことから,学生が他者からの評価を強く意識した時,実際の能力よりも低値を示し,実際の能力が正確に測れない可能性が考えられる。

また,本研究の調査対象である1,4年次生は別集団であるため,社会人基礎力の経年的な変化を調べることができなかった。

これらのことから,正確に社会人基礎力を把握し支援していくためには,自己評価と他者評価を合わせて同集団を継続的に評価する必要があり,その評価を学生が前向きに捉えられるように支援することが,社会人基礎力を育てる一つの方法として挙げられると考える。

謝　　辞

本研究の調査にご協力いただいた学生の皆様に感謝申し上げます。

文　　献

社会人基礎力育成ワーキンググループ(2010):社会人基礎力の育成を目指した看護学実習における育成・評価プログラムの開発・実証,岐阜大学医学部看護学科,34-43.

軸丸勇士,伊藤安浩,大森美枝子,他(2006):児童生徒や学生の生活体験不足と今後の実践的課題－体験の調査を通して－.日本生活体験学習学会誌,6,29-42.

速水敏彦・木野和代・高木邦子（2004）：仮想的有能感の構成概念妥当性の検討，名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要　（心理発達学専攻），51，1-8.

河合塾（2011）：経済産業省委託事業　平成22年度産業技術人材育成支援事業　体系的な「社会人基礎力」育成・評価モデルに関する調査・研究実施報告書，270，2016-12-21，http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/2011chosa.pdf

経済産業省（2005）：社会人基礎力に関する緊急調査，2016-12-21，　http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/2008chosa.pdf

経済産業省（2006）：社会人基礎力に関する研究会「中間取りまとめ」（概要版），2016-12-21，　http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/chukangaiyo.pdf

北島洋子，細田泰子，星和美（2011）：看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討，大阪府立大学看護学部紀要，17（1），13-23.

北島洋子，細田泰子，星和美（2012）：看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係，日本看護学教育学会誌，22（1），1-12.

箕浦とき子，高橋恵（2012）：看護職としての社会人基礎力の育て方　専門性の発揮を支える3つの能力・12能力要素（第1版），48，日本看護協会出版会，東京．

永田頌史（2014）：若者のメンタルヘルス問題と心理社会的背景－家庭，教育，社会環境など－，産業ストレス研究，21（3），219-228.

日本看護協会（2005）：2004年新卒看護職員の早期離職等実態調査報告書，20，46-47.

日本看護協会（2016）：2015年病院看護実態調査－日本看護協会，2016-12-21，　http://www.nurse.or.jp/up_pdf/20160418114351_f.pdf

An Investigation of into Their Differences by Attribute of Fundamental Competencies for Working Persons of Undergraduate Nursing Students

Naoko KOJIMA* and Noriko OCHIAI

Key Words and Phrases：Undergraduate Nursing Students, Fundamental Competencies for Working Persons

---

*A Graduate of The University of Shimane